

なぐられるかなぐりかえすか

中学二年の孫が友人二人を連れて遊びにきた。話題は暴力になり、私は自分の経験を話した。後日、友人たちは孫にいったらしい。「おじいちゃんの話をもう一度聞こうよ」と。

私は旧制高校一年にある運動部に入っていたが、読書や勉強の時間がなくなるので退部を求めた。そんな理由で退部したのは開校以来一人もいないので、当然拒絶される。それ以外のうまい口実をもうけることを、私は潔いさぎよしとしなかった。やがて全校運動部の問題となり、圧迫が私に集中する。友も遠ざかる。寮生活をしていたので、深夜侵入しては、げたばきのまま布団の上からふんづけたり、けつたりされる。恐怖と屈辱の日夜である。こんな不法に対して教師なんてなんの頼りにもならん。私は家から短刀を取り寄せ懐にして寝た。うわさは広がり夜襲はなくなった。

私は学校図書館に通い本に埋まる誇りで、やっと自分を支えていた。いよいよ除名式。親しかった連中五十余人がとりまく中を、屠所とのヒツジのごとく正座させられた。

壁高く掛かっている私の名札がさおで落とされる。かん高く道場に響いた。主将がその木片で私の横顔を思い切りたたいた。たたく者もたたかれる者も、まだ子供。双方蒼白、ふるえている。だから一回めは空振り、二回めで決まった。怒号一声「出ていけっ」。この瞬間、私は自由をかちとった。

しかし、悔しさが後から込み上げた。あの空振りの瞬間をとらえて、「ばか者っ」となぜ全身の怒りを爆発させなかったのかと。

それから茫々^{ぼうぼう}四十年、その主将が大阪府某部長の時、その時のことを謝罪する便りがきた。彼はずっと苦しんでいたのである。なぐられたら二倍にして返せというひともいる。二倍にとは必ずしもなぐり返すことではない。なぐらないこともなぐる以上の場合もある。

(一九八五年七月八日)